



Title	「水」が持つ価値とは何か : 第11回有識者インタビュー : 島谷幸宏氏
Author(s)	中村, 晋一郎; 島谷, 幸宏
Citation	水道公論. 2026, 62(1), p. 40-46
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103545
rights	日本水道新聞社提供
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「水」が持つ価値とは何か

―第11回有識者インタビュー― 島谷幸宏氏―

インタビュアー、原稿執筆…中村晋一郎（名古屋大学大学院工学研究科准教授）
インタビュー…島谷幸宏（熊本県立大学特別教授、太正大学客員教授）

2024年5月号から始まった

本企画では、上下水道や水環境、農業水利、河川、水循環などの各分野で活躍する有識者に、私たちが大切にし、誇りに思うような「水が持つ価値」についてインタビューを行ってきた。そんな本企画も、いよいよ11回目を迎える。水に関する価値観を、幼少期の体験から持っていた方もいれば、学生時代に築き上げた方もいる。一方、その価値観が活動ともに形成され、拡大してきた方々もおられた。第11回目では、河川と流域を主のフィールドとし、研究から実践まで幅広く活動される島谷幸宏氏に、「水が持つ価値」に関する考えを尋ねた。

島谷幸宏氏の経歴

島谷氏は1955年に山口県に生まれ、1980年に九州大学大学院工学研究科修士課程修了後、1980年に建設省に入省し、1982年に建設省土木研究所（現独立行政法人土木研究所）研究員、1993年からは同所河川環境研究室室長を務めた。2001年から2003年まで国土交通省九州地方整備局武雄河川事務所所長を務めたあと、2003年から九州大学大学院工学研究院教授、2021年に同大学退職後から現在まで熊本県立大学特別教授を務める。専門は河川工学・河川環境。日本湿地学会会長、応用生態工学会副

会長などを歴任した。

住民参加の川づくりや多自然川づくり、自然再生、川の風景デザイン、あまみず社会、流域治水、技術者育成などに精力的に活動してきた。主な実践例として、宮崎県五ヶ瀬町の小水力発電を活用した町おこし、佐賀県松浦川アザメの瀬湿地再生、嘉瀬川石井樋の復元などがある。著書に『河川風景デザイン』、『河川の自然環境の保全と復元』、『水辺空間の魅力と創造』（共著）など多数。

次のインタビューは、島谷氏が水に関する分野に入った当初からあまみず社会のプロジェクトに取り組んでいた活動までの水への価値観の変化について尋ねたもので

ある。

水分野に入ったきっかけ…建設省入省時

中村 島谷先生が水の分野に入るきっかけを教えてください。私の理解が正しければ九州大学の学生時代は水とは異なる分野の研究室にいらつしやいましたよね。

島谷 そうです。学生の際は構造力学研究室にいました。建設省に入るときに、河川局を希望して入りました。構造力学を研究していたのですが、構造力学は人間がつくったものを解析する学問で、何か境界条件が決まっています。境界条件が決まっているものに対して、人間がつくったものを、人

間が解析するというところに、何となく魅力を感じなくて、河川の方がよく分からないからいいかなと思います、水を選びました。

中村 建設省に入省されてた当初は、どんなことをされていたのでしょうか。

島谷 最初に山梨県に行きました。もう最初から出向でした。山

梨県の河川課に入って、技師をやったんですね。事務所が作った設計書をチェックしたり、中小河川の計画をつくったりする部署でした。事業を取りまとめたり、本省のヒアリングに行ったり、そういう仕事をしていました。流域界みたいなのを求めるときに、流域に行って歩いて、流域界って難しいねというのをすごく感じました。農業用水路だとか、そんなの全部歩かないと、どっちに水が流れているか分からないし、地図上だけで分からないというようなことを知りました。

また、山梨県で衝撃的だったのは、堤防が裏までコンクリートや石で張っていることですね。護岸の根入れも2メートルもあって、普通の中小河川の根入れ深は1メートル程度な

のですが、会計検査院が来て、どうして山梨県だけ違うんだといった質問をされると、先輩たちが、「いや、武田信玄のときからやってる」だなんて答えると、会計検査院もやっぱり何も言えない。水というのは不思議な世界だなと思って、何が正しいのだろうなど。

九大は当時、土木工学科と土工土木学科で学科が分かれていて、私は水工系とは違う学科でした。だから力学系の学科に行ったわけですが、偏微分方程式が出てくるようなところじゃなくて、常微分方程式のところはずっといままので、水分野は難しいなと思って、それで次の職場を土木研究所に希望したわけです。

中村 建設省に入ったときに、水や川について、何か守りたいとか、大事だと思うことはありましたか。

島谷 分からないですよ。川って本当にどの程度重要なんだろうとか、水って何だろうとかとか、まだ、ど素人です。ただ、道路とかのように人工的で人間が考えた範囲で物事が動くという世界

はあまり好きではなくて、環境だとか水だとか、そういう少し不安定なものに興味がありました。

土木研究所での蓄積の時代

中村 1980年に入省されて、土木研究所に行かれるのが1982年ですね。

島谷 1982年に土木研究所の都市河川研究室に入りました。そこで僕が最初に担当したテーマが、都市域に望まれる河川像に関する研究でした。

中村 土研に入って感覚も変わってきたと思うのですが、仕事や川に対して、その当時、先生が重視していたこととか、大事に思っていたことはありますか。

島谷 まだ勉強中ですね。当初、都市域に望まれる河川像という研究をどうやって進めるかというような議論をずっとしていましたが、室長が松浦茂樹さんに代わって、

松浦さんのアプローチがまったく違って、すべてのことを歴史学から解くというアプローチになりました。これはすごく面白くて、それで人と水のかかわりとか、人と水の過去から今に至る歴史的な

かわりとか、親水活動実態調査とかをしました。茨城県的那珂川を対象に、上流から下流まで、人がどこで遊んでいるかという調査です。これによって、河川の形態、河道特性と言いますが、その河川の形態と人の活動が密接な関係があることを知りました。そういう研究を2、3年して『水辺空間の魅力と創造』（鹿島出版会、1987）という本を松浦茂樹さんと一緒に書きました。

土研の中で面白かったのは、入ったところは、ちょうど河川環境に関して萌芽期だったことです。当時初めて多摩川で河川環境管理基本計画というのができて、ここは自然に配慮しましょう、ここは人が利用しましょうといった、ゾーニングの概念が入ってきて、そういう空間計画みたいなことが始まったのが、僕が入った頃でした。

研究担当の最初はトンネル河川の計画などのハード系のこともやっていましたが、最初の研究は親水の研究です。東京都土研の山本彌四郎さんが土木学会の年次講演会で親水という言葉を初めて

提案しました。今では辞書にも載っている言葉ですが、土木学会から出てきた言葉です。彼らはその概念を実際に江戸川区の古川親水公園などで示しました。これには大変感銘を受けて日本中の事例を探して、先ほどの本に載せました。

次の時代になると景觀研究をしないといけなくなりました。当時土木研究所には篠原修さんが緑化研究室におられたので、篠原さん

の本などを読んで勉強し、河川について体系的にまとめました、それが「河川風景デザイン」という本です。それから次に、多自然型

川づくりが1990年に出てきました。多自然型川づくりのベースは河川形態学と生態学ですから、生態学について学びました。この成果は「河川環境の保全と復元」という本にしました。河川環境に関する研究は、空間管理計画から親水事業、それから景觀、生態系という形に、わずか20年の間に、いろいろなものが出てきました。それに対応するために非常に幅広く勉強させていただきました。

中村 たった20年の間で目まぐ

るしい変化ですね。

島谷 それに由来して、すべてガイドラインを作らないといけないだったので、私はその関係のガイドラインを20冊ぐらい作りました。

河川環境に関するガイドラインは建設省としても初めてですから、土研が中心になってやらないといけないというので、一生懸命勉強をしてやるという時期がずっと続きました。だから、蓄積系の時代がすごく続きました。

中村 その当時、重視していたことって、どんなことだったのでしょうか。

島谷 当時は、阪神・淡路大震災があつたり、東海豪雨があつたりしましたが、今ほど洪水は多くなくて、そういう環境に関することを、順番に勉強していった感じなんです。だから、水に親しむことへの歴史的な観点とか、現場に行つてどうやって人が利用しているのかとか、親水活動の基準づくりや、そのための調査をどうすればいいのかとか、徐々に川が好きになつていった時期です。何を重視するかということではなく、色々なことを勉強しながら川とは何かを考

えた時期です。

中村 島谷先生の中に、川とか水の面白さや重要性が明確に現れてきたのはいつごろなのでしょう

島谷 徐々にです。だんだんと、ちよつとずつ。多自然型川づくりが出てくるぐらいから、多自然型川づくりの講演とかをすると、住民の方が来て、「あなたいいこと言っているけど、全然現場じゃやうなつてないわよ、おいでよ、来てよ」とか言われて、そういう市民と行政の間に入つて調整するよ

うな仕事が出てきたのは生態系の問題が出てからです。多自然型川づくりが出てからです。

そうした調整をする仕事がどんな出てくる中で、ますます市民の人たちがなぜこんなに川のことを大切に思うんだろとか感じました。やはり生態系をやるようになったのは大きいんです。川の中に生き物が棲んでいるということを、私は前からすごく思っていて、環境観というか、環境とは何かということを常に考えていました。中心に人がいるのか、中心に人がいないのかというのは非常に重要で、

人間にとつての環境なのか、生物も含めた環境なのかというのは非常に大きな概念の違いで、私はそこで、やはり人間は生き物の一部であつて、環境の一部だということを中心に河川環境は展開すべきだと考えるようになってきました。

とくに、1990年ぐらいを境に大きく変容しました。多自然型川づくりを始められた建設省の技官、関正和さんの話にすごく感激しました。そうして全国のいろいろな場所で、いろいろな人たちが、先輩たちがいい川をつくっていきま

す。北海道の精進川や鳥取の八束川などの写真を見て、自分もこういう仕事をしたいたいというふう

に、だんだんと思うようになっていきました。

1990年というのは、まだ私も30代の後半なので、完全に自分の中でこういうふうになりたいなとかいうことを十分に考えるまでには至っていなかったです。自分で見ても奥手ですね。すごくゆっく

り変わっていつている。

中村 何かすごく急に何か変わったというよりは、徐々に自分の河川観のようなものを育んでき

たみたいな感覚ですね。

島谷 それで1990年代の後半くらいから、都市化の勢いが収まって、都市洪水がずいぶん克服されていくわけです。その代わり、川がすごく直立の護岸になって、人から離れていたり、生き物がいなくなったりということが起こってくるのが、1990年代の後半くらいからで、そのころに流域で考えるというようなものが出てきます。

武雄河川事務所での実践

島谷 武雄河川事務所の所長のときには、やっぱり、事務所というのは現場の仕事なので、現地で何ができるのか、現地の人とういうふうにかかわりながら、国土交通行政ができるのかということ、を考えていました。

当時の事務所の倉庫の中には、古い計画書とか文献があふれていました。古いダム計画書などが全部あるわけです。そういう資料を片っ端から見ました。単位図法とかで推計された流量と、今の計画流量が全然変わってなくて、ダムの計画も含めて計画論という

のが積み重ねの中で物事が決まっていくなのだというのがよく分かりました。河川工学というのはそういうものだと、だんだん現場に行つて分かってきました。事務所の中に歴史的な文献が置いてあるから、それをもう綿密に読んで、迅速図を買って、所長の大きなテーブルに、とくに六角川の地図を張り合わせて、古い本を見ながら、その地名とか、全部その地図に書き込みながら、この時代のこのときにこの改修をやったのかとか、じゃあ、ちよつとこのところは分からないからと、地元の人に聞きに行ったりしました。地元に行けばいろいろと教えてくれました。

そうやって歴史的なことを、本当に現場で辿りながら調べる日々が続いて、水というのが古代から綿々と伝わっていつて、それが近世になって基本的な水の体系がつかられて、それをなぞっているのが現代だというのがよく分かりました。ですので、この時期に時間スケールがとても長くなったと思います。

中村 話を伺うと、土研のとき

は土研のときで楽しそうだったのですが、事務所にいた2年間は、やはり島谷先生の中ですごく大きな2年間だったように見えます。

島谷 大きいですよ。実践ですから。今までは机上の空論だったものが、自分でできる。だけど、実際、川を設計してみようと思うと、いまいちできないわけです。それで近自然工法の父と呼ばれるスイスのクリスチャン・ゲルディにも来てもらって、どうやってやっているんだと聞いたりしつつ、ほとんど自分で考え、地元の人とも相談しながらアザメの瀬（松浦川に再生された湿地、2017年に土木学会デザイン賞 最優秀賞を受賞）が出来上がりました。

中村 そのときに重視していたことや大切だと思っていたことは何ですか。

島谷 やっぱ自分が考えている川の在り方なるべく表現できるような河川管理に変えていくということです。計画論とか、合意形成の仕方とか河川改修の思想とか。当時、基本方針とかをつくる時期だったので、基本方針の委員会をどうやってつくるかと、公

募型でやってみようかと、そういう合意形成型の河川管理に変えたときに、どういう形でそれを体現する方がいいのかということ、自分なりに考えて、模索していました。

中村 それを変えることによって、先生が水や川について守りたいことは何だったんでしょうか。

島谷 当時、私が考えていたのは、今思うと流域治水的な発想です。上流では河川改修をしすぎずに、川幅を広げすぎないようにするとか。川の蛇行とかを残しながら、ゆっくり下流に流すとか。流域基本高水みたいな概念をつくって、川でどれくらい流して、流域のため池や地下浸透を含めて、どういうふうな流域全体で水循環を健全化させるかと考えていました。

中村 その当時、六角川など、実際の川で仕事をする中で、水に関連して重要だと思ったり、誇りに思ったりすることはありましたか。

島谷 アザメの瀬というのは自然再生事業なんですけど、流量をカットできる施設でありつつ、遊水機能を有する土地でもあり、今

出てきている流域治水のいくつかの政策の先取りをかなりやっていると思います。ちょうど私が事務所に行った時期に、1997年に自然再生基本法ができて、九州でも1個くらい自然再生をしようということ、どこか手を挙げないかというときにすぐ手を挙げました。そういう時代の流れの中でやっています。

九州大学に戻ってから現在まで

中村 時代の流れでいうと、2011年東日本大震災は非常に大きな出来事だったと思います。私が島谷先生と一緒にいるのとやらせていただくようになったのも、東京の善福寺川での活動が始まった2011年からです。私の印象だと、それまで多自然川づくり、里川、自然再生に関するプロジェクトが中心だったものから、この頃から雨水に関する活動が増えてきました。2015年には島谷先生が代表でJST—RISTEX「分散型水管理を通じた、風かおり、緑かがやく、あまみず社会の構築」プロジェクトが始まります。島谷 2003年に九大へ教授

として着任して、当時東京工業大学の教授で環境哲学の桑子敏雄先生と一緒に仕事をすることになりました。それで、日本の物語は水の物語なんだと分かりました。日本書紀を読んで、日本の国土形成の物語というのは水を中心とした物語なんですよ。結局、稲作を中心とした物語なのです。スサノオノミコトなんて典型ですが、ヤマタノオロチ（原稿執筆者注：斐伊川が氾濫する様子を大蛇になぞらえたものという説がある）を退治してクシナダヒメ、稲の田んぼのお姫様を手に入れるわけです。

つまり、洪水を防御した後には、田んぼなどの国土の開発がちゃんとできるということです。治水をやるから開発ができる、リスクと恵みのマネジメントという概念が非常に重要なことが、確信に変わっていきました。そして、志賀島に安曇という海の民が山をほめる「山ほめ祭り」を見に行った時に、海の民が山をほめるということ、流域という概念が古代からあったということを確認しました。水循環というのをやっぱり古代から大切だということを人は理解してい

て、それをあたかも流域とか水循環とか現代の概念として表現するけど、これは日本の非常に伝統的な水の使い方であり、考え方なのです。

水は資源なので、水をためつつ使いながら、洪水もゆっくり分散させながら流すという仕組みが我々のベースにあって、それを近代河川主義になって水を集めるという治水になって、その矛盾が徐々に出てきているということ、すぐく私は感じていたわけです。私が六角川での事業をやっていたとき、六角川はそれまで無堤で、無堤のときの氾濫と有堤のときの氾濫というのは全然違っていて、無堤のときの氾濫というのは水がゆっくりと溢れてゆっくりと引いていきます。近代治水に対する課題が明確に見えていました。そして、福岡で水害があったとき、もう1回環境と治水を一緒にしたような新しい水循環の管理みたいなどころに踏み出したいと思いい、JST—RISTEXのプロジェクトを始めました。

中村 グリーンインフラが注目され始めたのも、ちょうど同じく

らしいタイミングです。

島谷 グリーンインフラについては、国土管理の中に生態系や自然環境の保全と管理を入れていかないといけないという思いがともありました。それで、東日本大震災があって、国土強靱化が進むにつれて、環境を専門としている人たちの中で大きな危機感がありました。

それで国土強靱化をバックアップするために、レジリエンスジャパンという民間の組織ができて、みんなが集まってやる中で、2015年ぐらいからグリーンレジリエンス（自然の力を活用した国土強靱化）というような概念も出てきました。そして第二次国土形成計画のとき、生態系を国土計画の中に入れていきたいという思いがあったんですが、グリーンインフラという概念が海外で出てきていたので、その言葉で入れた方がいいんじゃないかということをもっと議論して、そして国土形成計画の中にグリーンインフラが入りました。

東日本大震災のときに、防災の専門家、それも災害が起きたとき

の専門家が中心に復興の委員は構成されていました。これは復興に関わるわが国の大きな問題です。

復興のことを考えると、本当は、防災の専門家だけではなく、災害が起きてから復興が終わるところまでを全部を理解して、それも災害と復興がもたらす人間への影響と環境、生態系への影響を包括して見る人がやった方がよいと思います。そういう意味では現在の復興の専門家の関わりには問題があります。

震災が起こったすぐ後に、環境再生と経済的社会的復興と一緒にした案を提示したかったしアイデアはありました。ただ、当時はEco-DRRとかの概念が明瞭じゃないこともあって提言までいじりませんでした。あの当時は学識者にも力がなくて、それだけの提案をする力もなかった。今だったら、流域治水とかも出てきて、もう少しEco-DRR的な概念で案を提示できるはずです。

中村 2010年代前半の東日本大震災の復興や雨水、グリーンインフラに関するプロジェクトをやられていた時、川や水に対して

何を重視、あるいは大切だと思っていましたか。

島谷 この時に明確になってきました。リスクの管理と恵みの管理のマネジメント、それらを一緒に包括的にやることです。そしてそれらは絶対に、生態系の保全とか自然の力みたいなものをベースにしなければだめだということが明確になってきました。また、日本の国土が水というものをベースにして発展してきたということが、もう完全によく分かるようになってきました。

それで球磨川の流域治水へと展開していくわけです。2020年7月豪雨のあと、あまみず社会を拡大的に展開しているのが球磨川の流域治水プロジェクトです。それはリスクと恵みが完全に一体化したマネジメントの提案になります。

中村 では、その水とリスクと恵みの統合的なマネジメントをやることによって、何を守りたい、あるいは、何を達成したいと思われているのですか？

島谷 豊かな世界ですかね。豊かさというのは何かということに

なりませんが、金銭的な豊かさじゃないですよ。私たちが目指しているのは、コミュニティがあつて、みんなで助け合つて、公助、共助があつて、その中でみんなで地域をつくり上げていって、地域の資源を上手に活用して、環境を守りながら、持続的な社会をつくるということに尽きます。ですので、考えているのは国土の再編です。20世紀型の国土から21世紀型の国土への再編です。

中村 国土を再編するときに、やはり残すものは残す必要があると思います。その際、現在の水や川に関して何かいいと思うことや、誇りに思うことはありますか。

島谷 やはり近世の水管理技術が残っているところです。日本の一番いいところはそこですよ。近代以降、ハード技術で全部抑え込もうとしたわけですが、結局それはできないことが気候変動によって明確になりつつあるわけです。技術力のない時代に作って、今でも使われている近世までの技術は日本の宝です。

水への価値観の変化

中村 これまでを振り返ってみて、島谷先生が水について守りたいことや誇りに思うことが大分変わってきたことが分かりました。その変化が、先生が実際に携わったプロジェクトなど、いろいろなことに強く反映されていると思いますが、正しいですか？

島谷 正しいです。やはり災害の現場に僕もすぐ行くようになつた。それによって川の災害に遭つた人に会うと、誰も川のことを悪く言わないことを経験するわけです。例えば、石巻では津波では、あれほど大きい被害が出たのに、堤防を作るのに反対する人がほとんどでした。川が見えなくなる、川に近寄れなくなるのです。

朝倉であればどの水害があつて、たくさんの方が亡くなったのに、またあの川で遊びたい、ホテルが出るのを見たいと言われる。行政官とか河川技術者の持っている感覚と、一般の人たちが思っている恵みとリスクのバランスを取る感覚の間には大きな乖離があります。ですが、地域の方々が思う恵み

とリスクマネジメントのバランスの取れた姿、それが本質的な国土の在り方なんだろうというのが確信に変わりました。水の管理、水利権に対する見方もすごく変わりました。水利権があるからこそ中小河川は守られている。コモンズの権利なので、慣行水利権みたいなものが、よその人が勝手に水を使うということを防いでいる。非常に重要なコモンズの権利だということが分かってきたし、そういうことを通して、水を対象にして何かをやるということは、コモンズの、みんなの共通の理解、共通の合意がなければできないということです。

中村 最後ですが、先生が40代前後に戻って水の分野で何かするとしたら、何をやられますか。

島谷 多分同じことを続けると思います。もう少し国際的な連携や自分の思想とかを広げるとか、そういうことをしたいかもしれません。あと、水文学をやりたいかもしれませんが、山からどれくらい水が出てきて、田んぼから水がどれくらい出てきて、都市からどれくらい水が出てきているというの

を、日本のあらゆる場所で水文データを観測しながら、それに基づく水文学をやってみたい。水文学は20年、30年データを取らないとできないので、学問もそういうことをちゃんとやる学術であってほしい。今は人が取ったデータを解析するのはすごくはやっていいますが、一つひとつのデータを取るというのは、AIもロボットもできないので、そういうベシツクなところの基礎情報を取りにいくということをも、もし40代ならやりたいです。

まとめ

島谷氏のインタビューから抽出された水への価値観（水について守りたいと思うことや誇りに思えるようなこと）は次のとおりである。

●自然の力をベースにした、水のリスクと恵みの包括的なマネジメント

●コミュニティが作り上げる持続的で豊かな世界

●日本が元来持つ水管理技術

付記

本インタビュー企画は、大阪大学感染症総合教育研究拠点の研究倫理審査委員会の承認を得て、村上道夫（大阪大学）、中村晋一郎（名古屋大学）、乃田啓吾（東京大学）によって行われた（承認番号2023 CREER-1212）。クリタ水・環境科学振興財団（水や水環境分野における研究者のネットワークの構築を支援するための助成）を受けて実施された。ここに謝意を示す。

<https://www.genryo.co.jp>

可搬型砂ろ過浄水装置

モバイルシフォンタンク



緊急災害
対応型

高濁度
に強い

ろ過材
交換不要

日本原料株式会社

〒210-0005 神奈川県川崎市川崎区東田町1-2
TEL.044-222-5555 FAX.044-222-5556